ないおん
平成26(2014)年4月号

声に聞く

花の姿に仏説を聞く

願通寺 住職
寺川幽芳

かつて、京都女子大学に勤務していたころの思い出ですが、学生の宗教教育を支援する宗教部の活動の一つとして幾つかの自主ゼミがあり、私も仏教美術のゼミを担当していました。

毎年、「仏像が好き」とか「古いお寺が好き」という学生さんと、ひろく仏像のかたちや心について学んだり語り合ったことは、私にとって忘れられない思い出になっています。

ある時、一人の学生さんが「仏教を花にたとえると何の花ですか?」と問いかけました。意外な問いに「君たちは、どんな花をイメージするの?」とたずねると、しばらくしていろんな花の名があがり、やがて「蓮の花」にまとまりました。実は、「花にたとえる」という発想の理解が難しくて、その質問の意味を共有するのに時間がかかったのですが、それがかえって、皆のイメージを深めてくれました。

例えば、桜の花をイメージした人があげた「諸行無常という教えを実感できる」という理由は、皆が共感をもちましたが、桜の花だと「日本の花」というイメージの強さが、仏教の普遍性を解り難くするのではないかという鋭い意見も出て、結局「蓮の花」に落ち着きました。「だって、仏さまはみな蓮の花のうえに居られるよー」という直感的な意見が強い説得力を発揮したのも、若い人の感性を物語っているようで、とても勉強になりました。

蓮の花は、古来、世界各地でその美しさを愛でられ聖なる花とされましたが、とりわけ仏教においては、その教えそのものにかかわる深く大きな意味をもつ花となりました。

蓮が育つのは、水清く澄みきった湖や池ではなく、日本で言えば泥田です。蓮はその汚泥のなかにしっかりと根を張り、蓮根が成長しないと花は咲きません。そして、蓮は、その汚泥の中から真っ直ぐに花茎を伸ばして美しい花をひらきます。しかも、泥の中からぬきんでて花ひらいた花弁には、全く泥は付いていません。

仏教徒は、そこに、四苦八苦に満ち煩悩に溢れた人間世界の泥田に生きる生命を享けられたお釈迦さまが、悟りをひらいて仏陀と成られた事実と重ねあわせて、蓮の花をもって仏陀の座としたのです。しかも、ただそれだけでなく、そこに、仏陀の教えを聞き、仏陀の世界・浄土を観たのです。

『仏説阿弥陀経』には、阿弥陀仏の浄土に咲く美しい蓮の花は「青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光を放ち、どれも美しく、香りは気高く清らかである」と、どの花も、それぞれの個性を十分に輝かせながら、しかも浄土の花として一つの世界に生きていると説かれています。

春・四月ー、満開の桜が花吹雪となって散り急ぐ姿に「諸行無常」の仏説を聞き、その花の命の行方を「私のこと」として考えるにふさわしい時機に出合える幸せを大切にしましょう。

泥洹(ないおん)とは、
心に喜びを感じていく世界、
幸せを幸せと受けとめていく
世界なのです。

育心

「河童」のひとり言

ホッとハウスinおおの代表
梅林厚子

『お前はこの世界に生まれて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ』

この言葉は、「蜘蛛の糸」「羅生門」で知られる作家、芥川龍之介さんの「河童」という短編小説の一節です。とても衝撃的な文章で、今も時々思い出すことがあります。

河童の世界に迷い込んだ人間が、河童の世界のことをいろいろと話してくれるのです。

『河童のお産位、可笑しいものはありません。―略― お産をするとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ「お前はこの世界へ生まれて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ」と大きな声で尋ねるのです・・・・、尋ねられたお腹の中の子は「僕は生まれたくありません。」と、返事をします。』 その子は自発的に出産を拒否します。

理想郷の表現ではなく、人間界のあらゆるものを諷刺している小説だと言われています。

わたしはこの小説を読んで、このように、生まれてくる子どもに選択の権利があるとしたら、この私を親として選んでくれるだろうか? 選んでもらえるような生き方ができているだろうか? と問うてしまいました。また私自身もわが母、わが父の子として、生まれることを選んだろうか? と思いました。

そして「河童」の世界でなくてよかったと胸を撫で下ろしたくなると同時に、「河童」たちの言い分に対してすべて否定できない気分にもなりました。

明確な答えを出すことなどできません。しかし縁あってこうして今、目の前にいる愛おしいわが子と、計り知れない条件の中で親子となったことは事実です。実に不思議な、不思議な、不思議な出遇いだと言わざるを得ません。

お腹の中に授かった時点で、親子の関係が紡がれたわけですが、共に新人であり、右も左も分からず、右往左往しながら無我夢中の子育てが始まります。育てているつもりが、子どもの笑顔や寝顔に励まされ、子どもから元気を貰っている自分自身に気づかされたりもします。

一人で立っていると驚き、歩いたと喜び、どうして分かってくれないのと涙し、無我夢中の子育ては、少しずつ私を親たらしめてくれているようです。そんな子どもに「私を親として選んでくれてありがとう」と心の底からこみ上げてきます。

そして、河童はひとり言を発しているかも知れません。

「あなたの子どもは、ほかの誰でもないあなたを選んで生まれてきたのだ。あなたでなければならないのだ。人間世界の親たちよ、自信を持って生きて欲しい。子どももまた、あなたを見ももってくれている。」と。

花かごの駅

稲葉邦子

てふてふも蜜吸ひ
夜は寝るものを
吾子よよく食べ
よく眠れかし

坊や、蝶々さんもストローみたいなお口でお花の蜜をたくさん吸って、夜になったらおネンネするのよ。坊もたんとご飯を食べて、ぐっすり眠って大きくなってね。
(蝶は蛾と同じ鱗翅目ですが蛾とちがって昼間とび歩き夜は休む)

いのちほっこほっこ

～浅原 才市さん①～

第31回

文 中川真昭
絵 徂徠匡男

実母トメさんが往生されたのは、才市さんが十九歳のとき。トメさんは枕元に才市さんをすわらせ、こうおっしゃったのです。「スギさんをだいじにしておくれ。わたしの手で、おまえを育てられなかったのは、ほんとうにすまなかった。…お寺に参って、仏法を聞き、お念仏さまをよろこぶ人になっておくれ」と。

才市さんがのちのち「おやのゆいごん なむあみだぶつ」といっていた親は父のことではなく、実の母のことであったと、高木雪雄(島根県江津市・浅原家のお手次ぎの涅槃寺前々住)さんがその著『才市同行/才市の生涯とその周縁の人々』(永田文昌堂・一九九一年刊)に記していらっしゃいます。

才市さんは乳離れのした頃、ある事情があって、生まれた小田村から小浜のスギという女性に引きとられ、十一歳まで育てられます。スギさんは才市さんの父要四郎(法名西教)さんのいとこでした。小さい頃いのちを助けられた恩返しに才市さんを育て上げたいとの申し出でした。

才市さんの伝記で伝えられている母スギは養母で、したがって父要四郎がスギと離婚して云々も、実はまちがいであることも、高木雪雄さんは指摘されています。

十一歳まで育てられた才市さんは当時の慣習どおり、小浜にあった祖母の実家へ舟大工として弟子入りします。

二十五歳の時、温泉津村の一歳年下のセツと結婚。伝記などでは、才市さんは大酒のみで暴れん坊であったと伝えられていますが、高木雪雄さんは、「もしそうであったなら、村の旧家で有力者の家の娘さんセツさんとの結婚は許されなかったのでは。やはり誤って伝えられた姿でしょう」とのべておられます。

二十九歳の時、娘のサキに恵まれます。才市さんは父親としての自覚が深まると、当時の小浜の先輩たちを見習って、県外への出かせぎを考えます。

大阪や九州への出かせぎが中心だった当時、才市さんは、父からのすすめと、自分の今の腕が生かせると、九州博多の中州にあった舟大工の仕事場を決めます。涅槃寺にずっと住みこんでお念仏をよろこぶ日ぐらしであった父の助言はこうでした。

「すぐ近くの祇園町に萬行寺さんがある。そこに七里恒順という和上さまがおられるから、しっかりとご教化がいただける」。

その頃、石見地方(島根県)の僧侶が、七里和上からご教化をいただいていたということも、才市さんの背景にはあったのでしょう。

遠近各地から、萬行寺の七里和上のご教化をねがう多くの人々にまじって才市さんの姿もあったのです。三十一歳の才市さんに、なにがあったのでしょう。七里和上が与えられた言葉が残っています。

三十一まで なにが
えろうなった
こざるのやうな
ちゑばかり
こざるのやうな
はからひやめて
南無阿弥陀佛を
いふばかり

私の雑記帖

ブッダと私

劇団わらび座
戎本みろ

ブッダを演じることを伝えられたのが去年の9月、一年以上のお付き合いとなりました。お付き合い、などとはおこがましいですが、知れば知るほど、生身の人間としてのブッダの喜びや苦衷をあらたに見出し、その懐の深さを強く感じます。そして、私自身の人生を振り返ってみても、多くの出会いのなかにブッダがみたものを感じ、ああ、まさに……ブッダは最初から仏様だったわけでなく、人として自分の目で沢山のものをみて、誠実に向き合ったのだなと思うのです。ブッダを演じてゆくための大切な心根は、私たちが生きる「いま」の中に数多く含まれているのです。

ブッダの実在が実証されたのが1868年、そしてまたその生きた時期が2500年よりも二世紀前だったかもしれないという説が、最近発表になりました。新事実が発見される度に、私達と同じように呼吸をし、この世を生き抜いた「人間ブッダ」としてのぬくもりを感じます。ブッダは決して民の上にいる人ではなく、常に隣にいたのだと思います。そして共に考え、共に悲しみ喜んだ。そうして人々の心に身を添わせたことが、現在の仏の道、つまり仏教という大きな教えにつながっているのではないか。そう思うと、こんな言葉が浮かぶのです。

「ブッダは特別な人であって特別ではない」

確かに、仏教という、いまや世界中で拠り所とされている教えを生み出したことは、特別などという言葉では言い表せません。しかし、人類の歴史のなかで、ブッダのように多くの人々の苦しみを背負い、道を切り開こうとした人は無数にいたと思います。そして現代にも多くのブッダ(の心)が息づいている。長い歴史のなかでは無名であっても、その無数のブッダ達の姿に、きっとブッダ自身は涅槃からそっと微笑んでいる。そして、未だ変わらぬ人類の課題に心を痛めているような気がします。ブッダの志を継ぐのは今を生きる私たち。小さな活動からでもいい、手をつないでいきたいですね。

生きている心
千住敬愛幼稚園編『生きている心』

たからもの
いわした なつね(五歳)

なっちゃんの
たからものはね
パパと ママと
おにいちゃんと
パパと ジジと
ようちえんの 友だちと
せんせいとね
いっぱい あるねんで

挿絵・野村 玲